

“届けよう、服のチカラ”アワード2022

受賞校のみなさま
おめでとうございます！

【最優秀賞】

小学生の部 **国本小学校**（東京都）

中学生の部 **鯖江市東陽中学校**（福井県）

高校生の部 **兵庫県立川西北陵高等学校**（兵庫県）

【優秀賞】

名古屋市立植田東小学校（愛知県）

学校法人角川ドワンゴ学園 N中等部

南丹市立園部中学校（京都府）

宮城県小牛田農林高等学校（宮城県）

岐阜聖徳学園高等学校（岐阜県）

【UNHCR特別賞】

横浜市立嶮山小学校（神奈川県）

【最優秀賞】～小学生の部～ 国本小学校（東京都）

もう一度、命を吹き込もう

生徒による発表（小学6年生）

私たちは2年間SDGsについて様々な角度から学んだ。

自分たちの身近にある自然にふれあう体験学習をしたり、サステナビリティの本質を考え、エシカル消費マークの意味や意義を調べたり、環境活動家のアクションや熱い思いから、今まで考えたことのない視点でSDGsと向き合った。日本企業の先進的な取組を調べていくと、実際に現場を知りたいと学習意欲が湧き、地元のスーパーの店長に来ていただき、話を聞いた。実際に店内やバックヤードを見学し、初めて身近なSDGsの取組があることを実感した。さらに国境なき医師団の出張授業や、世界各国の海洋汚染の学習から、SDGsの取組は日本だけでなく世界に広がっていることを実感した。

自分たちには何ができるか？

世界へ目を向けたとき、自分たちには何ができるのか、原点へ戻りそれぞれの意見を出し合った。私たちの意見の根底にあったのは、「もう一度、物に命を吹き込もう」という思いだった。そこで、3つのアクションに取り組んだ。

- ①“届けよう、服のチカラ”プロジェクト
- ②学校BOOK OFFプロジェクト
- ③収益の寄付プロジェクト

アクションする上で気を付けたこと

★人々と直接コミュニケーションをとる

アクションには多くの人が関わってくれた。直接話し、物の受け渡しをすることで、物に対する思いを肌で感じる事ができた。地域のお店には直接依頼に行った。

その結果、商店街92店舗すべての店舗から協力いただいた。

その成果は、学園内やBOOK OFF本社で自分たちの言葉で発表した。

★多くの人を巻き込む

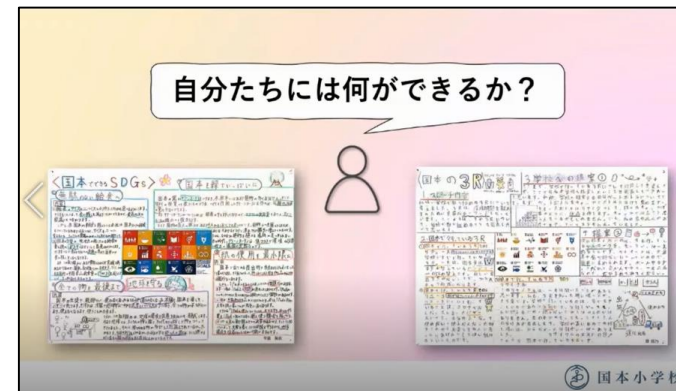
ユニクロの社員の方から直接話を聞き、そこで感じたことを多くの人に知ってもらうためには、自分が行動することが大切だと確信した。その結果、2068枚とたくさんの服が集まった。自分たちのアクションが形として見えた瞬間だった。学校BOOK OFFプロジェクトでは自分たちで店舗を運営し、3日間古本を販売した。その結果、196,705円の売上を上げた。その売上は、話し合いを重ね、賛同する慈善団体へ寄付した。

★地域社会に根付くアクション

人々がつながり、持続可能な社会につながるプロジェクトを地域社会で丸となって行えば、世界中の困っている人を救うことができるということを実感した。

また大きな達成感と使命感を感じた。

これからも自分たちのアクションを社会のチカラに変えていきたい。SDGsの取組を行う上で必要な情熱を次世代へつなげていきたい。未来の社会をよりよくしていきたい。



生徒感想文

なぜ争い事のせいで、学校に行けない子どもが出てしまうのだろうか。なぜ人種差別のせいで、今まで通りの生活ができなくなってしまうのだろうか。何か自分にできる事は無いだろうか。

（省略）今私は、このように、『服のチカラ』と『難民』というものについての話を、分けて考えてきたが、この二つは、大きな関わりがあると私は思う。なぜなら、服のチカラによって、難民の人々の生活をより豊かにできるからだ。そしてこの活動は、服を寄付すればいいだけであるため、簡単にできる。一着の服でひとつの命が救えるのだ。これは決して、言い過ぎではない。それだけ服には、大きなチカラがあるのだ。服は、さまざまなことを学ぶきっかけになる。服は、大きなチカラを持っている。そして服は、暖かい。

【最優秀賞】 国本小学校（東京都）

活動詳細

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

国本学園（幼稚園・小学校・中高等学校）、学園関係者・保護者・喜多見商店街振興組合（全加盟店舗92店舗）

【活動のねらい】

教科横断型でSDGsの学習を始めて2年目。子ども達から「自分達から行動したい。そして、世界を少しでもいい方向に…」という思いが自然と出てきた。

そこで、今回の最終目標を「物の命を延ばし、身近な人や物、学校、世界中すべてを笑顔にする」と決め、下記を重点目標とした。

<重点目標>

①自分たちができることを自分たちで考え、それを実行するために多くの人を巻き込み成功に導く。

【自主性の発揮、コミュニケーション能力の向上、地域や企業との連携】

②実践からさらなる社会貢献へとつなげる。

【オリジナリティ、他教科との連動、他学年や保護者・地域住民の意識変革】

【活動内容】

■プロジェクト参加のきっかけ

1年目は、SDGs全般について学習し、自分達の身近なもの（学校の草木を使った草木染め、商店街のサミットストアへの見学など）や日本企業の取り組みを題材に取り組める内容を実践した。

ただ、SDGsは、日本だけの問題ではなく、世界に目を向けなくてはいけないことに気付き

（JICAやオーストラリア大使館との授業、国境なき医師団の方たちとの対話、道徳の授業など）、自分達の身近でない世界へ、どんな取り組みをしたらよいか考えるようになった。「本学園で私たちが世界に向けてできる取り組み」を出し合い、その中から実際に実現できそうなものを話し合った。

そこで子ども達は、リユースに注目し、「家庭で不要になったものに、もう一度命を吹き込もう」という考えから、家庭で不要になった子ども服を集める「届けよう、服のチカラプロジェクト」の参加を決めた。

■子ども達から新たなプロジェクトの提案

子ども達から「届けよう、服のチカラプロジェクト」と並行して、本学園の制服、さらに古本を集め、それを本校保護者や在校生、地域の方に販売し、その売上を学校や世の中のために使いたいという意見が出た。『家庭で不要になったものに、もう一度命を吹き込もう』という考え、『昨年度の学習で関わった企業』とのつながり、そして、『自分たちがしたいこと、できること』子ども達の想いが掛け合わせ、壮大なプロジェクトが動き出した。

○学年：小学6年50名

○活動の枠組み：総合的な学習の時間

【活動内容】

■「服のチカラ／本のチカラ PROJECT」<キャリア教育>

まずは、7～9人で店舗を構成し、社訓を決めてから、店長や商材、広報や経理、設備などの担当を決めた。店舗担当者会議を行い、そこで出た議案や決定事項を店長や関係担当者に伝えながら、各店舗のオリジナリティを大切にさせるため、店長と担当責任者でさらにブラッシュアップさせ、チーム内で情報を共有した。子ども達は、小学校を越え、本学園の幼稚園や中高、学園関係者、商店街や地域の企業にも協力してもらうために自分達で交渉を行った。幼稚園保護者向けと小中高等学校保護者と在校生向けに3日間店舗を出した。そこでの売り上げを学校のため、社会のため、世界のためにどのように使うかを各店舗で相談し、寄付先を決定した。

<古着や制服、古本の集め方と工夫>

保護者向け・児童生徒向けの手紙、教室／廊下掲示用のポスター、児童玄関で流すCM作成などの広報活動を広報／商材担当が中心となって進めた。さらに、小学校と中高の朝礼で、直接呼びかけた。さらに喜多見商店街振興組合にも協力を仰いだ。

回収場所では大きな手作り看板やポスターを出し、回収推進のCMを流した。

<成果>

今までのSDGsの点として散らばっていた学習が、児童の心の中で線としてつながり、「自分ができる社会貢献は何か」と問う思いが面として広がった。また、「企業とお客さんの自分」という意識が、企業との活動を通して「社会につながる自分」を感じることに変化した。

自分が行動することで、社会を支える力になれることを理解できた。

また、他学年の「来年、再来年は自分たちも…」という意見や保護者の好意的な意見も目立ち、学校・学園・地域全体の意識が変容したプロジェクトとなった。

【その他特記事項】

「届けよう、服のチカラプロジェクト」で回収した服：**合計＝19箱 1668着**

<地域との連携>



【最優秀賞】～中学生の部～ 鯖江市東陽中学校（福井県） 服のチカラと私たちのチカラ

生徒による発表（中学3年生）

皆さんは福井県がどこにあるかご存知だろうか？
中部地方に位置し、どこにあるか分からない都道府県ランキングで上位にあがる。

【これまでの活動】

本校3年生は、1年次から大学生や企業とのワークショップ、地域の環境調査等を通して、学校と地域社会を歩き来しながらSDGsを学んできた。このような活動から、2022年に「ふくいSDGsパートナー」に登録されたり、JICAエッセイコンテストにおいて学校賞を受賞したことで、地元新聞紙や全国紙でも取り上げられている。

【課題】

このような活動の中で、大きな課題を発見した。「SDGsが自分ごとにならない」ということだ。プロジェクト開始前に、アンケートを実施したところ、「SDGsは自分でも取り組むことができる？」という問いに、99%が「できる」と回答したが、「SDGsの課題は自分に関係があるか？」という問いに、61%の生徒しか「ある」と回答しなかった。原因について、先生や生徒にアンケートを実施したところ、「話の規模が大きい」「成果が目に見えない」「見返りが無い」「恵まれた環境にいる」という声があった。そこで、“届けよう、服のチカラ”プロジェクトを活用した。

【取り組み】

1.パンフレット制作

活動を多くの人に知ってもらい、中学生でもSDGsに取り組むことができる。ということ伝えた。裏面には県内でSDGsに取り組む企業紹介も行き、県内外に配布し、地域を巻き込み、地域全体でSDGsに取り組んでいく体制づくりをした。

2.チラシ制作

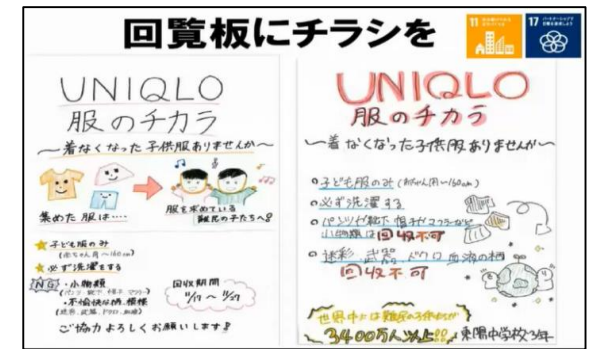
SNSや新聞の呼びかけよりも「チラシ」での呼びかけが一番効果的だと感じた。校区は地域とのつながりが強く、学校の取り組みに協力的であるため、地域内のすべての家庭に配布することができた。地域の特性に合わせた活動が効果的だと分かった。

3.ポスターセッション

SDGsについて考えることを目的に高校や公民館でポスターセッションを行った。市役所のさばえSDGs推進センターでは鯖江市の教育長を交えてポスターセッションを行った。地域の方にも問題意識を共有した上で、服の回収に取り掛かることができた。

【活動後】

活動を行っていく上で、地域の方からお手紙をいただき、SDGsの輪が地域に広がったことを実感することができた。また、活動終了後に、再度、「SDGsの課題は自分に関係があるか？」というアンケートを実施したところ、「ある」と回答した生徒が13%増えて**74%**になった。服のチカラは私たちでも世界に貢献できると実感する素晴らしい機会となった。この活動を通して、SDGsを自分事ととらえることが地域に広がっていくと嬉しい。



生徒感想文

- 私たちの3年間の活動を地域の皆さんに共有してSDGsの輪を広げることができたので、地域の皆さんからまた他の人へと輪が広がっていくことを願います
- さばえSDGs推進センターの方のお話を聞いて自分達の活動の自信になったし、まだまだ自分達にできることがあるなと実感しました。回覧板で活動を知った母も服を持っていこうと言っていたので、地域を巻き込んでSDGsの輪を広めることができていると思います。1年生から始めてきたSDGsの活動が大企業と一緒に取り組みをできるまで来たので頑張ってたよかったです。
- はじめは、SDGsのことを上手く理解できなかったのに今は言葉にして伝えることができても頑張ってきたなと思ったし、地域の人に自分の口でしっかりと説明しSDGsについて少しでも広めることができ嬉しかったです。

【最優秀賞】 鯖江市東陽中学校（福井県）

活動詳細

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

北中山小学校、片上小学校、中河小学校、河和田小学校、鯖江高校、北中山公民館、片上公民館、中河公民館、河和田公民館、さばえSDGs推進センター（鯖江市役所）、福井新聞、株式会社fuプロダクション

【活動のねらい】

SDGsは社会全体で取り組むべき大きなテーマであるが、中学生にとって身近に感じにくい側面をもっており、SDGsについて学んでも他人ごとで終わってしまうことが課題である。近年、高校でも地域探求学習をSDGsと関連づけて進める学校が多い。高校生であっても自分ごととして考えることが課題となっている。中学生の総合的な学習から高校の探求学習へと繋げることによって、SDGsをより自分ごととしてとらえ、社会と関わる力を培うことができると考える。本校3年生では、総合的な学習の時間で1年生のときからSDGsの学習をしており、学校と地域社会を行き来しながらSDGsを学ぶことで、多角的な視点でSDGsを捉え、自分ごととして考え行動していく力を育成することをねらいとしている。

本校3年生は今までに、

- ・SDGs視点で見た地元新聞スクラップ
- ・「ふくいSDGsパートナー」への登録
- ・JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2021での学校賞受賞
- ・福井県内のSDGsに積極的に取り組む企業とのワークショップ
- ・県内企業と協力して行った地区内の環境調査
- ・海浜自然センターでのビーチコーミング

などを通して世界や日本の現状を知り、生徒同士はもちろん、多くの大人と意見交換してきた。そこで今年度は、今まで学習してきたことを地域の皆さんにも知っていただき、「SDGs地域ごと化」を実現することを目標として活動している。「服のチカラ」では、服をただ集めるだけではなく、生徒が3年間で学んだことを発表して意見を交わすことで、多くの人が世界の現状を知り、様々な社会問題を自分ごととして捉えてもらうことを目標とした。

【活動内容】

① 今までの学習をまとめたパンフレットづくり

多くの人に本校の取り組みを知っていただき、服のチカラに協力していただくために、これまでの3年間の総合的な学習の中で学習した内容と、服のチカラの回収に関する内容を1つのパンフレットにまとめ、地元小学校や地元公共施設をはじめ、企業や団体などに配布した。

学年：中学3年105名
活動の枠組み：教科
(総合的な学習の時間)

【活動内容】

② チラシを回覧板で配布

チラシを作成して校区内の回覧板で配布し、本校のホームページにも掲載し、広く呼びかけた。

③ 出身小学校や県立高校、地元公共施設でのポスターセッション

地元の小学校や県立高校、公共施設でポスターセッションを行った。

【成果と課題】

- 10日間の回収であったが、**7281枚**の服を回収することができた。
- 自分たちの学習してきたことを地域の方々に発表し、意見交換をすることで、新しい視点でSDGsを考えることができ、地域の方々にもSDGsの視点で学校行事や「服のチカラ」を考えていただくことができた。
- 服のチカラを1つのボランティアとして取り組むのではなく、3年間の学びの集大成として取り組むことができた。この活動を通して、3年間の学びを地域に還元できたことを実感している。
- ホームページや地元新聞、パンフレットなど、様々な方法で服の回収を呼びかけたが、1番効果があったのは回覧板のチラシだったと感じている。回覧板のチラシを見て、服の回収を始める前から多くの服が公民館に届けられていた。SNSをはじめとするインターネットはこういった呼びかけをする上で便利だが、地域の特性に合わせた呼びかけも効果的であることがわかった。
- 生徒たちが中学校を卒業した先でもSDGsを意識した生活を送ること、また周りの人や環境をまき込んで行動できることを目指して、これからの学習を進めていきたい。

【その他特記事項】

本校のSDGsに関する取り組みは、今まで地元新聞社や地元テレビ局のほか、読売新聞朝刊や朝日新聞「SDGs ACTION」などで全国的に取り上げられている。今回の「服のチカラ」の取り組みについては地元新聞社や地元テレビ局で紹介された。

こうした取り組みについてメディアを通じて知っていただき、それを見た団体や企業と一緒に活動することで、活動の幅を広げることができたことと実感している。



<ポスターセッションの様子>



<服の回収後の記念撮影>

【最優秀賞】～高校生の部～兵庫県立川西北陵高等学校（兵庫県） 普通の私たち196人が30か所の拠点で服のチカラプロジェクトをやってみた

生徒による発表（高校2年生）

本校は偏差値や生徒数は全国平均程の高校。ごく普通の私たち200人が30か所の回収拠点で本プロジェクトを行った。200人30か所となると、それぞれの向き合い方や進め方はさまざまである。

“届けよう、服のチカラ”プロジェクトの第一印象

意欲的な人もいる一方で、努力で変えることのできない<環境の違い>と難民キャンプという知らないことに<向き合う怖さ>から、関心がなかったり、意欲が低い人もいた。

これらの印象を変えるきっかけとなったできごと。それは母校小学校での活動だった。

★母校での活動

あるチームは、テスト期間中でも時間を見つけて度々小学校へ訪問し、難民やプロジェクトについて説明した。小学生に対して視線を低くし、距離感を近くすることで、より一層プロジェクトの思いが伝わり、小学生は、興味深々で話を聞いてくれた。

別のチームでは、プロジェクトの説明だけでなく、自分たちが受けた「命の持ち物けんさ」を小学生版に作り替え、授業を行った。小学生は素直な発想力があり、小学生に教えることで小学生から学んだ。

★地元公民館での活動

公民館チームは、プロジェクト呼びかけとともに、公民館の文化祭の運営も手伝った。地域の方の優しさに触れ、受け取った優しさを誰かに届けたいという思いから、文化祭の司会を引き受けた。

広がる服のチカラプロジェクト

私たちとコミュニティがつながるだけだったのが、誰かの優しさを誰かに渡すことで、広がるpower cycle お互いに前向きな気持ちをわたしていく、empowermentが生まれた。このプロジェクトは、服のチカラだけでなく、人のチカラも教えてくれた。

【人の繋がりは、世界を変える原動力となる】

私たちは大人になるにつれ、自分のことに精一杯になり、人と向き合わなくなったり、繋がりをもたなくなったりする。しかし、私たちがこんなにも人とプロジェクトと向き合い、繋がりを持てたのは次の3点があったからだ。

- 小学生から学んだ、
- ①どんな人にも興味を持つ好奇心
 - ②自分から関わる行動力

地域の方から感じた、③優しさの相乗効果

小さなコミュニティ、小さな原動力であったとしても、世界を変える原動力となる。私たちは世界を変える程のチカラを持っていたのだ。



広がる服のチカラプロジェクト

私たちとコミュニティ

広がるpower cycle

お互いのempowerment

生徒感想文

私はこのプロジェクトに取り組むまで、難民と呼ばれる人々のことについて深く考えたことはなく、遠い存在だと思っていました。しかし、この活動についてのお話を聞き、「命の持ち物けんさ」を行う中で、今、災害などが起きたら私も同じ状況になる思い、力になりたいと感じました。

（省略）服の回収に行った時には、1つの箱ではおさまらないたくさんの服が集まっていました。もう着られない服にも思い出などがあり、手放すのは勇気があることだと思います。それでも服をたくさん持ってきてくれたのは、私が力になりたいと思ったのと同じ気持ちを、小学生にも伝えられたと思うと、すごく達成感がありました。

プロジェクトに取り組む中で、とても大きくて困難な問題に対しても力になれることがあるんだと気付くことができました。もちろん一人の力ではできることに限界があります。しかし、大勢の人が協力してくれたことで、多くの服が集まり、より多くの難民の人々の力になることができました。服のカプロジェクトは私にとって多くの気付きを与えてくれました。ここで得たことを活かして、これからいろんなことに挑戦してみようと思います。

【最優秀賞】 兵庫県立川西北陵高等学校

活動詳細

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

(兵庫県川西市・川辺郡猪名川町内施設)と新聞社2社様
多田保育所、エンゼルキッズ多田、川西市立多田小学校、川西市立緑台小学校、多田公民館、
緑台公民館、猪名川町立猪名川保育園、YMCAしろがね幼稚園、猪名川町立猪名川幼稚園
等、地元幼稚園、小学校、新聞社、公民館など

【活動のねらい】

本校は2年生196名全員で、プロジェクトに取り組んだ。
ねらい①国際貢献を人任せにせず、共に考える自分たちの問題、「自分事」として取り組むこと
ねらい②地域コミュニティを巻き込んで、生徒自らが中心となって活動すること
本校は学区が広く、兵庫県川西市内と川辺郡猪名川町内の全域から生徒が通学している。
このプロジェクトでは自分たちの生まれ育った地域の幼稚園・保育園・小学校・公民館などを活動拠点と
した。

【活動内容】

活動のねらいを達成するために、196名を出身小学校によって地区別に6クラスに分け、地区ごとに活動
した。あらかじめピックアップしておいた回収拠点へ、生徒が自分の力でプロジェクトの趣旨説明と協力を
依頼した。生徒たちの自主的な協力依頼の呼びかけに応じていただき、回収拠点は30か所にのぼった。

■ プロジェクト初回の9/20 :

生徒間で活動拠点を決定、役割分担から始まった。役割を製作担当・訪問担当・交渉・連絡担当に
分け、担当間でも協力しながらプロジェクトを進めることとした。

■ 9/27 : ユニクロオアシスタウンキセラ川西店店長江本様によるプロジェクトガイダンスを実施し、
プロジェクトについて丁寧に説明いただいた。

■ 10/4 : 次に難民支援の深い理解を進めるため、学生団体SOARによる「命の持ち物けんさ」の授業
を実施した。副代表山本様のファシリテーションのおかげで生徒は「夢を失えば絶望するしかない」等、
自分が今日突然難民になったらどうなるか、疑似体験を通してプロジェクトの目的と活動の意義を深く理
解することができた。

■ 10/11~18 : 各班の製作担当を中心に一斉に回収箱、宣伝ポスター、家庭や地域の方に配布す
るチラシの製作が始まった。30班が回収先に衣類を持ってきてくれる方がどんな方か考え、
30パターンのユニークなものが出来上がった。並行して訪問担当は30か所の回収拠点にアポイントを
取り、プロジェクトの説明や回収箱の設置、回収期間や宣伝方法の相談のための訪問をスタートした。
生徒は慣れないながらも、回収拠点に事前にどのような説明を行うか原稿を作成し、
班ごとに高校生なりの活動の趣旨説明・衣類回収への協力依頼を行った。

学年：高校2年196名

活動の枠組み：教科（総合的な探究の時間）

【活動内容】

■ 10/25 : 衣類回収スタート。回収箱を設置するだけでなく、回収先によっては様々な工夫を実施した
班もある。小学校活動班では、自主的に小学校の昼休みに班全員で訪問し、昇降口で昼休み中の児
童や児童会代表にプロジェクトの説明を行い、衣服の寄付を呼び掛けた班（猪名川町立白金小学校
班）もある。小さな児童にもわかりやすく説明し、彼らが理解した様子を見て生徒は達成感を得られた。

また、先方の小学校からプロジェクト説明のチャンスをいただき、6年生の授業を担当した班もある。授業
ではプロジェクトや難民の説明の他、「命の持ち物けんさ～小学生バージョン～」を自分たちで考案し、6
年生と活動を共にした。生徒たちは純粋な児童の意見に驚き、同時に満足した様子であった。この取組
みは神戸新聞・毎日新聞にも掲載された。

衣類の回収は、事前に当番を決め、定期的に回収に訪問したり、回収箱がいっぱいになれば学校や各
自の携帯電話に連絡をいただいたりと、回収が始まって1週間経過した11月からは毎日どの班も忙しく、
衣服の回収に出かけていく様子が見られた。

衣類のお礼に一言メッセージのシールを衣類を
提供してくださった方の胸に貼ってもらい、お礼
の気持ちを伝えた班もあった。



【活動の成果・課題】

- ①生徒の世界的な問題への関心が高まったこと、そのために「自分たちが行動した」という自信に繋がった。胸を張って自分たちが「難民の子どもたちのために衣類を集める活動をした」と説明できる活動となったこと。また、その成果として初年度だが、9070着を回収・発送できたこと。
- ②地域から感謝されたり、回収拠点の皆さんから工夫を提案されたりし、それに応えようとする姿勢が育ったこと。ユニクロさんや学生団体SOARさんによる事前学習のお陰でその活動のひとつひとつが難民支援に繋がっていることを実感できたこと。
- ③今後の課題として、より地域との協働を深める活動にできる可能性があるということ。地域のイベントなどに参加したり、企業とコラボレーションを通して、校外との協働や触れ合いをもっと深めていきたい。

【優秀賞】 名古屋市立植田東小学校（愛知県）

サステナブルファッションプロジェクト～世界と地球の未来のために～

生徒による発表（小学6年生）

私たちは総合の学習で、サステナブルファッションプロジェクト～世界と地球の未来のために～というテーマで6年生全員で活動を行った。

【事前学習と出張授業後の学習】

まず、服について興味をもつために、服に関するクイズをつくり、ポスターで発表した。その後、GUの店長の方に出張授業に来ていただいた。出張授業後は、難民についてクイズを解いて、難民について詳しく学習した。日本に住む難民の話を読んで、さらに詳しく知った。難民の子ども達の動画では、悲惨なことが世界で起きていることを知り、驚いた。服については、服の一生、環境、人権に関わる問題についてカードを使って学習し、理解を深めた。服を作ったり、捨てたりする過程で、さまざまな問題があることを学んだ。

【回収活動のさまざまな工夫】

服の回収活動は、グループに分かれて宣伝することにした。効果的な回収方法をみんなで話し合った。自分たちでお店に電話をかけて、服の回収について交渉した。準備ができたら、校内を回って、回収を呼び掛けた。紙芝居にしたり、クイズにしたりする等、工夫した。幼稚園や保育園では劇を作って、難民のことや服の回収について分かりやすく伝えた。集まった服を体育館に並べると、たくさんの服が集まったことが分かった。

【振り返り】

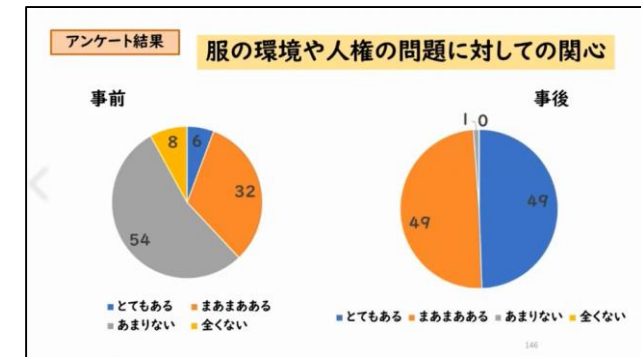
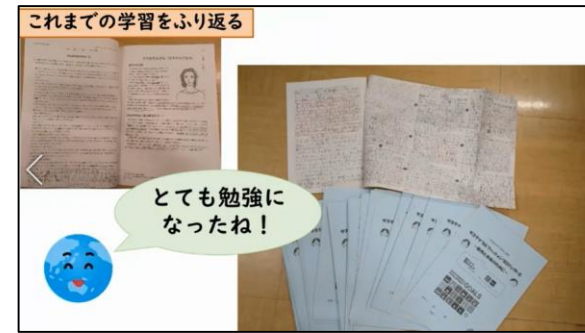
服の発送が終わったあとは、これまでの学習を振り返った。学年のみんなにアンケートをとったところ、難民に対する関心が、「あまりない」「全くない」が半数以上だったが、終了後は、98%の人が関心を持っていた。服の環境や人権の問題に対する関心も同様であった。

【成果】

- ・たくさんの服を集めることができて、達成感ややりがいを味わうことができた。
- ・服の大切さを知ることができた。
- ・学校や近隣の人に難民や服の問題について知ってもらえた。
- ・学年のみんなが手を抜くことなく活動をすることができた。

私は、今まで難民の人々との関わりはないと思っていたが、プロジェクトを通して、難民の人々と深く関係していることに気付いた。私たちが集めた服を、難民の方が着てくれると思うと嬉しく感じる。服を集め終わったときは、達成感を感じることができた。

僕は、将来お金持ちになり、安定した仕事がしたいと思っていたが、プロジェクトがきっかけで、人の役に立つ仕事がしたい！と思うようになった。プロジェクトに参加することができて本当に良かった。



生徒感想文

■ いろいろな動画を見て、難民の人の辛さを実感し、前までは、「難民ってなんかかわいそうな人たちでしょ」って思っていたけれど、いろんな理由で大切に思い出の詰まった家を失い、時には家族までも失ってしまい、命からがらで、他の地域や国に逃げる人のことを「かわいそう」でおさめてはいけない気がした。

■ このプロジェクトを通して思ったことは、目に見えないような遠いところにいる人達でも、人のために何かをすることは気持ちのいいことだなと思った。また、協力して何かを成し遂げるのは楽しいなと思った。

■ 他人事だからと無視をする人もいるが、難民を助けてあげたい！難民に服を寄付して少しでも役に立ちたい！と思う人がたくさんいたから服がたくさん集まった。人の思いやりってすごいなって思った。

■ 今まで、1人でやるのが1番と思っていた。でも、今回のプロジェクトで、協力すれば1人よりももっと大きな力になるんだと思った。回収用段ボールを作ってくれた人がいれば、紙芝居や歌を作ってくれた人がいる。もし私が1人でやっていたら、ポスターだけだった。説明に行った後、みんな楽しかったと言っていて、やり切った感があった。それはがんばったからだと思う。

【優秀賞】 名古屋市立植田東小学校（愛知県）

活動詳細

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

名古屋市立植田幼稚園、にじいろ保育園梅が丘、名古屋植田ヶ丘こども園、その他、地元スポーツセンター、ドラッグストア、スーパー等

【活動のねらい】

- ・難民についてのクイズやインタビュー動画などの様々な資料を通して、難民がどのような人達であるのか、どのような問題や希望を抱いているのかなど、様々な角度から知ることができるようにする。
- ・服をテーマにした調べ学習や、服の一生について考えるグループ活動、服に関する事件の資料などを通して、普段何気なく着ている服には良い面だけではなく、人権や環境などの問題も隠されていることを知ることができるようにする。
- ・服の回収を呼び掛けたり、回収する活動をグループの仲間と協力して行うことを通して、人と関わる力、説明する力、社会に貢献する力、課題を解決する力など様々な力を身に付けることができるようにする。

【活動内容】

■出張授業前：

「服」というテーマで各自の問いを立て、本やインターネットを活用して、分かったことをクイズとその解説をつくるという形式でまとめたポスターを作成し、紹介し合った。「世界の民族衣装」「服の歴史」「服のリサイクル」「服ができるまで」「洗濯表示について」・・・など服に関して様々な情報を得た。

■出張授業後：

難民クイズを通して、日本にはどのくらい難民がいるのか、難民がどのような理由で祖国を離れなければならないのか、難民の方々の大変さや、難民となっても明るく前を向いて生きていこうとしている人達がいることを知った。難民や服について、より詳しく知った上で、改めて、難民の方たちに服を届けることがどのような意味があるのかを考えた。

学校だけではなく、地域の幼稚園や保育園、スーパーや薬局などでも集めようとなり、子ども達が、施設の方に電話交渉を行い、学校内や地域の施設にポスターや回収ボックスを届けに行った。

幼稚園では、劇を行い、園児に回収を呼び掛けた。学校では、ポスターだけではなく、紙芝居や、かるたやクイズ、歌など様々な工夫を行って服の回収を宣伝した。宣伝では、難民や服の抱えている問題についてもきちんと伝え、服を寄付することが難民を支援するだけでなく環境にも配慮できるように伝えた。約2週間回収活動を行った結果、段ボール箱23箱分が集まった。

最後に、協力してくださった学校の子供達や各施設の方々にお礼の手紙を書いた。

学年：小学6年101名

活動の枠組み：教科（総合的な学習の時間）

【活動内容】

■今後：

プロジェクトに参加したことで、子ども達は、世の中の課題に対して、自分たちで行動を起こすことで、少しでもその課題を解決するお手伝いができることを知った。

身近な世の中の課題を見付け、それに対しても行動を起こしていくような活動を行う予定である。

【成果と課題】（○：成果 ●：課題）

- 難民や服について様々な角度から学習し、難民の問題や服の環境や人権問題についてよく理解していたので、「まだ着られる服を寄付に回すことで、環境に配慮しつつ難民の方々の支援をしたい」と、意欲的に服の回収を呼び掛けることができた。
- 学校だけではなく、学校外の様々な施設に呼びかけを行ったことで、地域の人々と関わることもできただけでなく、より多くの服を集めることができた。
- 難民や服の学習から、服の回収までの様々な活動を通して、子ども達は、難民や服の知識だけでなく、人と関わる力、説明する力、社会に貢献する力、課題を解決する力など様々な力を身に付けることができた。
- 活動後は、難民や服について興味をもただけではなく、「食品ロス」や「ごみの問題」などの身近にある問題にも興味をもち、解決していこうという雰囲気があった。
- 学校行事の都合で、回収の期間が約2週間程度になってしまったが、期間を長く設けることができるように、もう少し早い時期から学習を進めることができるようにしておけば良かった。
- 今回は、服の学習をして服に興味を持ったところから、「服のチカラプロジェクト」の授業を活用するという流れで行ったが、難民の学習を先にしておき、難民支援のために何ができるかを考え、そこで「服のチカラプロジェクト」の活動を紹介し、参加させていただくという流れの方が、より自然な流れになったように思う。

幼稚園の子ども達に服の回収を呼び掛ける様子



4年生の子ども達にタブレットで作ったクイズを行い、服について学べるカルタを行って服の回収の宣伝をしている様子



【優秀賞】 学校法人角川ドワンゴ学園 N中等部

『デジタルツールを活用した衣類回収活動』

画像制作ソフト「Adobe Express」を用いてバナー画像を作成

生徒による発表（中学2・3年生）

【活動テーマ】

「デジタルツールを活用した衣類回収」をテーマに活動を行った。

【回収活動】

バナー画像を制作して保護者や関係者に衣類回収を呼びかけた。

バナー画像を載せた特設サイトは、保護者や学内限定公開だったが、閲覧数は1206回にのぼった。

■ バナー画像を制作する上で意識したこと

- ・服の行き先を伝えること
- ・子ども服が思い浮かぶような画像を使用すること
- ・本当に大切なことだけを書くこと
- ・「服が世界に届くといいな」と思いを込めたキャッチコピー

■ 回収時期

①文化祭開催日(11/12)

主に保護者や生徒が家庭で不要になった衣類を持ち寄った

②学校法人角川ドワンゴ学園N高等学校・S高等学校へ回収に出向いた(11/18)

集まった洋服は、回収対象外の大人用の洋服や小物等を含め、全1395枚となった。

【活動終了後の取組】

回収対象でなかった大人用の洋服や小物類は、衣類のリメイクやNPO法人へ寄贈し無駄なく活用した。

本来は捨てられるはずの製品に新たな価値を与えて再生する「アップサイクル」を実践し、小物入れやぬいぐるみティッシュケースなどにリメイク品を制作した。

他の方々にも気軽に「アップサイクル」を実践してもらうために、Googleスライドを用いて、リメイクまでの制作手順マニュアルを作成した

■ 活動を終えて～

- ・授業を通して、難民キャンプの存在を知り、あらためて着る洋服があることのありがたみを感じた。
- ・着なくなっていた洋服を必要とする人にあげたり、一着の服を着まわしたりするようになった。
- ・再利用やアップサイクルを意識して生活するようになった
- ・今回のプロジェクトで初めて難民の存在を意識した。継続してできることを行っていきたい。



生徒感想文

- このプロジェクトを通して、服にどんな力があるのかということに気づいた。難民問題についても、もっと社会貢献していきたいと思った。
- メンバー全員が意見を出しやすいと感じる雰囲気づくりを意識し、グループワークをスムーズに進められるようにまとめ、リードすることを心がけた。
- 実際に自分が洋服をたたんでみると、母がたくさんの服をたたんでくれていたんだと感じた。
- 難民の方へ何か支援したくても手順が多かったり、なかなか行動に移せなかったため、自分たちで衣類回収のためにいろいろ工夫してたくさんの衣類を回収することができてよかった。前から興味があった難民の支援に触れることができて嬉しかった。
- 募金とかあまりするタイプではなく、世界で起きている問題に直接貢献することがなかったが、自分たちの取り組みが難民支援につながってよかった。

【優秀賞】 学校法人角川ドワンゴ学園 N中等部

活動詳細

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

N中等部生徒の保護者、N高等学校、S高等学校、角川ドワンゴ学園 職員

【活動のねらい】

- ・服のチカラや世の中への理解関心を高める
- ・自分にもできる社会貢献があることを実感し、地球市民である意識を持つ

【活動内容】

衣類回収準備の制作→回収呼びかけ→衣類の仕分け & 梱包

Step1 : 衣類回収準備

バナー画像と衣類回収BOXを制作した。

Step2 : 回収呼びかけ & 回収

プロジェクトの特設サイトにStep1で作成した「バナー画像」を掲載し、保護者と学園関係者に向けてプロジェクトへの協力を呼びかけた。

- ①文化祭に来場した保護者や生徒から回収
- ②最寄りのN/S高等学校に訪問して高校生から回収

Step3 : 衣類の仕分け & 梱包

生徒たちが楽しく積極的に取り組めるように工夫をして授業を実施。

①UNIQLOのレシート風の集計表(Googleスプレッドシート形式)の用意
生徒たちが黄色セルに衣類の数量を入力すると、レシートの合計のように、自動的に回収した衣類の総数が集計される仕組みとなっている。

②服たたみ王 選手権の実施

服をたたむのが得意になるとメリット(例：家族が喜ぶ/かっこいい/一人暮らしの練習など)がたくさんあることを伝えた上で、一番綺麗に服を畳める人(服たたみ王)を決めるレクリエーションを実施。

【成果】

9キャンパス合計寄贈衣類：合計 956着(20箱)



制作スケジュール管理表で、生徒自ら進捗管理



プロジェクトの特設サイト



衣類回収BOXを制作



レシート風集計表

学年： 中等部1～3年369名 ※9キャンパス合計、全部で57チームを結成して活動
活動の枠組み： 教科（具体的に：プロジェクトN）

※「プロジェクトN」とは、社会に出て活躍するための知識やスキルを身に付ける
課題解決型学習(PBL)プログラム

【課題】

- ①高校生からの子ども服の回収が難しかった。(大人用の服が回収対象でなかったため)
- ②2つのプロジェクトを同時に行なったので指示が少し難しかった
N中等部では“届けよう、服のチカラ”(子ども服の寄贈)と並行して、“作り変えよう、服のカタチ”(衣類のリメイク=N中等部オリジナル。詳細はその他特記事項にて)というプロジェクトを行なったため、職員や生徒が混乱しないような丁寧な案内を要した。

【その他特記事項】

“届けよう、服のチカラ”と並行して衣類の回収(主に子ども服以外)を進め、“作り変えよう、服のカタチ”プロジェクトというオリジナルプロジェクトにも取り組んでいる。

【「作り変えよう、服のカタチ」の活動のねらい】

身近に存在する資源の力を見出す観察力と、その資源を有効活用する創造力を磨く(補足)“届けよう、服のチカラ”で主に学べるリユースやリサイクル以外にも、服のさらなる活用の可能性を探求するため、『アップサイクル』という言葉に注目した。このプロジェクトでは生徒が主体となって着なくなった衣類を回収し、服のリメイク品を企画&制作。

【「作り変えよう、服のカタチ」の活動内容】

衣類回収準備の制作→回収呼びかけ & 回収→リメイク事例調査&リメイク品の決定→リメイク品の制作→振り返り&成果発表会 (※ステップ1～2は“届けよう、服のチカラ”と同様)

Step3 : リメイク事例調査&リメイク品の決定 (11月末実施)

「自分たちも実践したいリメイク品」の候補をリストアップ。
実際に手元に集まった衣類からどんなリメイク品を作るかを改めて考えた。

Step4 : リメイク品の制作(12月～)

必要な道具や工程、布をまっすぐ切る方法など、全て自分たちで調べ、試行錯誤をしながら制作。

Step5 : 振り返り&成果発表会(12月末実施)

プロジェクトの終盤では授業アンケートを用いて、自身の成長や学んだことについて振り返る。



文化祭での回収の様子



誰に(難民の方々)、何を(服のチカラ)を届けるのか振り返った上で、1枚1枚丁寧にたたんだ

【優秀賞】南丹市立園部中学校（京都府）

今年で10年目！ 愛言葉は、“服のチカラ”

京都府の小さな田舎まちから、合計15782着の衣服を難民キャンプへ
～426名の“服のチカラ”委員とともに～

生徒による発表（中学1年生）

愛言葉は“服のチカラ”

10年間毎年“服のチカラ”委員を公募しており、今年は77名の委員が集まった。
出前授業前にUNHCRの「人を守る人の手」のDVDを視聴した。
今、私たちは自由に暮らせているけれど、自由に暮らせない人がいることを知って心が苦しくなったが、服を届けることで力になれると知ってうれしかった。私も服を届けて力になりたい。と思った。

【活動内容】

学校内でも地域でも愛言葉は“服のチカラ”！

A) 出前授業当日の司会進行・まとめ

出前授業前に、自分が小学生だった3-4年前に先輩が回収箱を小学校に設置して、服の回収を行っていたことを知っていた人は46%だったが、「協力しましたか？」という問いに対して、「協力した」と答えた人は8%だった。その後、授業を受け服のチカラのすごさを改めて知ることができた。

B) 校内での放送・お便り等の広報活動

C) 箱やポスター制作

制作作業はとても楽しく、自分たちが通っていた小学校の先生や後輩にメッセージを書いて届けることができた。

D) ケーブルテレビを通じたCM活動

CMは緊張したが、CM効果により、今年も地元の方から電話で問い合わせがあり、協力をお願いした。

E) ホームページを通じた広報活動

【回収活動】

全員で行う箱詰め作業では、同時に、生徒会・世界とつながろうキャンペーンも行った。
文化的なボランティア活動にも取り組もうと、アジアの子どもたちに絵本を届ける活動にも参加した。
世界に向けても愛言葉は“服のチカラ”！

通っていた3つの保育所へ協力をお願いした。「あ～服のチカラね。初めてだけど、自分の子どもが去年活動に参加していたよ」と言われ、イイ感じ。ここでも愛言葉は“服のチカラ”
保育園の子どもたちに分かりやすいように、回収箱やポスターを作成した。

1,2学期の活動は終了していたが、活動報告会をきっかけに、“服のチカラ”を愛言葉にして、3学期も活動することができた。貴重な機会をありがとうございました。



【優秀賞】南丹市立園部中学校（京都府）

活動詳細

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

園部中学校、園部小学校、園部第2小学校、園部保育所、城南保育所、南丹のぞみ園、など

【活動内容】

いつでも、「生徒自らが・・・」をきっかけに活動を展開している。
今回は7月の前期と10月の後期の2回に分けて実施。

事前に1年生の家庭科の授業で、“服のチカラ”委員を募集して、“服のチカラ”委員会を結成し、全ての活動を運営。
集まった77名を次の4つの班分けをした。

- ①ユニクロ亀岡店の方を講師にお招きする授業での司会進行班
- ②その後のまとめの授業を担当する班
- ③回収する段ボールや告知ポスターを制作する班
- ④校内放送やお便りで広報する班
- ⑤地元のケーブルTV局を通じて、回収に協力をお願いするCM告知班

活動内容は以下の通りである

- ①司会進行班は、当日の運営と回収前日に校内放送を行った。
- ②まとめの授業班は、感想文集と校内へ配布する“服のチカラ”たよりを制作。
- ③箱とポスター制作班は、子どもたちに人気のある絵を描いた回収箱やポスターを制作。
- ④CM告知班は、放課後に残って撮影。

いずれも、委員である生徒中心の活動であったが、2,3年生の先輩と全教職員は、「あっ、“服のチカラ”ね。わかった。わかった。がんばりや。」と委員に声をかけて、励ましていた。

本校では、“服のチカラ”が愛言葉になっている。

懇談に来校する保護者が衣服を持参しやすくするために、前期の回収は、7月の三者懇談会の時期に実施。
ケーブルTVのCMは1週間放映された。同時に、今年も地元の方から「“服のチカラ”の活動に協力したいので、持参します。」と電話があり、協力いただいた。地元でも、“服のチカラ”が愛言葉になっている。

前期は合計1764着の衣服を発送することができた。

体育祭と文化祭を終えた10月、後期の活動に入った。後期は、町内3つの保育施設に協力をお願いしたが、コロナ感染が広がり始めたため、委員ではなく、教員が保育施設へ持参することになった。
衣替えの時期とちょうど重なり、約2週間で合計1003着の衣服を回収することができた。

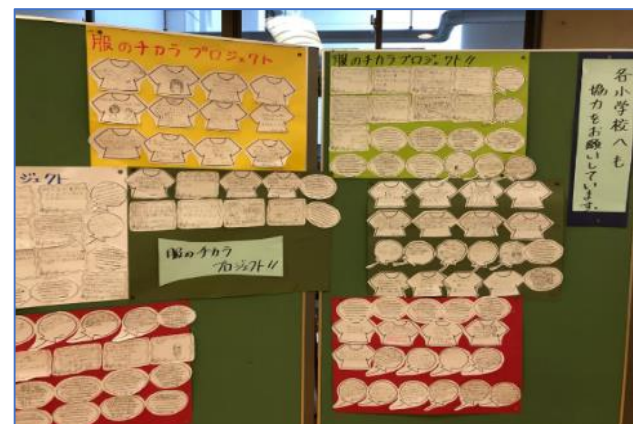
2022年度は、合計2767着の衣服を発送することができた。

【活動内容】 参加10年目の今年、改めて気づけたことは、保育施設や小学校と協働すると衣服の回収活動はもちろんだが、委員も教員も視野を広めることができるということである。

学年：中学1年124名（“服のチカラ”委員は77名）
活動の枠組み：教科（技術・家庭科「家庭分野」）



本校のホームページへのアクセス数は毎日大変多い
学校教育活動での国際理解教育のひとつとして、“届けよう、服のチカラ”プロジェクトをあげていて、回収活動の前後で更新をしている。



活動を進めていく中で、「小学校の先生にメッセージをおくりたい」という声があがった。

【優秀賞】宮城県小牛田農林高等学校（宮城県）

“服のチカラ”を通して、学校・地域・世界の思いをつなげる

生徒による発表（高校2年生）

これから「学校・地域・世界の思いをつなげる」をテーマとした活動を発表したい。
本校は、農業技術科と総合科学科があり、特に総合学科では昨年度よりSDGsに関する取組を始めた。
しかし、感染症の影響で、伝統校としてあった地域としてのつながりも途絶えがちとなっていた。

プロジェクトチームの結成

そこでこのプロジェクトを通して、地域を含めた人と人とのつながりを強くしたいと考えた。「とにかく何か新しいことにチャレンジ」したいと思う生徒46名が集まりプロジェクトチームを立ち上げた。

学校外での活動

★イベント・図書館マルシェで回収ボックスを設置したり、
町内の様々な団体が参加するみさとこマーケットでは、不要になった子ども服の交換会が行われていたが、残ってしまう子ども服が問題となっていた。そこでイベントの補助を行いながら、残された子ども服の回収も行った。

この2つのイベントは今年度から始まったもので、手探りの運営だったが、お互い協力しあい、新たな関係が生まれた。

★地域・町役場やコミュニティセンターに回収ボックスを設置したり、町の広報誌で取り上げていただいたりした。

新たなつながり

地域おこし協力隊の方には授業に来ていただいたり、新たなつながりが生まれた。

学校のHPや新聞での紹介で県内の方からたくさんの反響があった。

気仙沼市在住の方からは「震災のときにいただいた善意を、何かの形で社会へ返したい」と思っていた。ぜひ協力したい」という言葉をいただいた。

同じ宮城県に住みながらも、内陸に住んでいる私たちは、実は震災について話を聞く機会が多くない。そこで、服の回収と合わせて実際にインタビューへ伺った。

インタビューでは「震災のときもそうだが、戦後は物不足で大変だった。今は物があふれているが、捨てられる物も多くて胸が痛い。日本は豊かになったが、外国では難民の方々がかつての自分のように、物不足で困っている。できることをしたい」という言葉があった。

戦後78年が経ち、戦争を経験された方からのお話を聞く機会は本当に貴重だった。

難民はどこか遠い存在のように感じていたが、私たちとも深い関わりがあることが分かった。

インタビューの帰りには、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館を訪れた。プロジェクトを通して震災のこと、戦争のこと、たくさんのことに触れ、このプロジェクトが本当に大切なことであることに気が付いた。

プロジェクトを始めたときは、ただ「困っている人に子ども服を届けたい」という思いだった。しかし、活動を経て、校内や地域でさまざまな人と出会うことができた。今世界中で粉砕や悲しいことが起こっているが、服と一緒に、誰かの優しさや思いを届け、笑顔にできる活動をこれからも続けたい。

さらなる広がり～本校のホームページや新聞でも紹介～
反響があり、学校にたくさんの問い合わせがきた！！



さらに

「震災のときもそうだが、戦後は物不足で大変だった。今は物があふれているが、捨てられる物も多くて胸が痛い。日本は豊かになったが、外国では難民の方々がかつての自分のように、物不足で困っている。できることをしたい。」

との言葉がありました。

生徒感想文

町役場とコミュニティセンターには多くの方が訪れるので、回収ボックスを設置する場所について、町の担当の方と電話で相談したり、実際に下見をさせていただいたりしました。こうした機会は今まであまりなく、はじめは緊張しましたが、次第に慣れていきました。毎週一回、自分たちで日にちを決めて協力して定期回収をしました。

回収の際にちょうど服を持ってきてくださった方とお話することもでき、応援していただいたり、私たちが工夫して制作した回収ボックスについてお褒めの言葉をいただいたりすることがありました。活動が広がっていることを実感し、協力してくださる方がいることを嬉しく思いました。

ただ服を回収するだけでなく、たくさんの方と関わり、様々なお話を聞くことができました。震災をふまえた思いなど、直接お会いしたことでお気持ちがよく伝わってきました。服だけでなく、活動を通して出会った方々の思いをつないで届けたいと考えています。

【優秀賞】 宮城県小牛田農林高等学校（宮城県）

活動詳細

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

美里町、小牛田図書館、本小牛田コミュニティセンター、みさとこマーケット、大崎タイムス（新聞社）、河北新報社（新聞社）、ぶっくしえるふ（美里町ボランティアサークル）

【活動のねらい】

本校は宮城県の美里町に位置する、創立134年を迎える県内でも有数の伝統校である。特に総合学科では様々な授業でSDGsに関する学習を進めてきた。また伝統を生かして地域に根ざした活動を行ってきたが、新型コロナウイルス感染症の影響のため途切れがちになっていた。SDGsについても、生徒からは「もっと地域と関わりながら活動したい」との声があったものの、同様の状況だった。そこで持続可能な社会の実現のための実践をするだけでなく、地域とのつながりを再び強める契機としたいと考え、プロジェクトに取り組んだ。

【活動内容】

活動は総合学科の有志を募り、46名でプロジェクトチームを結成。活動場面は①校内、②地域、③イベントの3つとし、いずれも生徒主体で取り組めるようにした。

①校内での活動

校舎内の掲示板や各教室にポスターを掲示し、回収ボックスを設置した。さらに全校集会や昼休み等に全校放送で呼びかけたり、活動の様子をお便りで周知したりする等、全校に発信した。

②地域での活動

主に美里町の「まちづくり推進課」と連携し、町役場と本校近くのコミュニティセンターに回収ボックスを設置した。これを町の広報誌やチラシ等に掲載していただくことで、たくさんの服の提供があった。

③イベントでの活動

美里町の図書館で開催された「図書館まつり」で回収ボックスを設置した。子どもに関心を持ってもらえるよう、回収ボックスの形について生徒が話し合いを重ね、「服のチカラを届ける」というイメージでトラックを模したものを作成した。予定していた定期回収が追い付かないほど服の提供があった。活動以降、図書館とのつながりが増え、図書委員による展示や、本校で生産した農産物を館内で販売する機会をいただいたりするようになった。10月には、町内の様々な団体が参加するマルシェに参加。小さな子どもを持つ保護者のサークルは、不要となった子ども服の交換会をこのマルシェで予定していた。しかし交換会を経ても引き取り手のない子ども服があることが問題となっていたことから、本校生徒がマルシェの補助（司会や受付等）をすると同時に、プロジェクトの一環として子ども服を回収することとした。これにより、まだ着られるものの引き取り手がなかった子ども服について、廃棄することなく有効利用することができた。



学年：高校1～3年46名
活動の枠組み：課外活動（総合学科プロジェクトチーム）

【活動内容】

こうした取り組みについて、本校のホームページで情報発信したり、町の広報誌や地方紙でも取り上げていただいたことから、多くの問い合わせがあり、たくさんの方が本校へ服を郵送したり、直接届けたりしてくれた。そうした方に対して生徒が電話でお礼を伝えたり、プロジェクトに賛同する思いを伺った。中でも気仙沼市在住の高齢の方からは「東日本大震災の津波で被災したとき、多くの方から支援をいただいた。その時の善意を何かの形で社会へ返したいと思っていた。是非協力したい。」とお話をいただいた。生徒からも、電話だけでなく直接お話を伺いたいとの申し出があったため、実際に訪問して、服の回収とあわせて震災に関するインタビューを行った。本校は宮城県でも内陸に位置し、津波の被害を受けた方からお話を伺う機会が少ない生徒もいる。そのため、生徒には震災や津波被害についてもっと知らなければならない。という思いが強くなった。



インタビューをしている様子。
事前に質問する内容を決めてインタビューをしたが、それ以外にも震災当時のことや戦後のことなど、たくさんのお話をしていただいた。

さらにインタビューでは「震災の時もそうだが、戦後は物不足で大変だった。今は物が溢れているが、捨てられる物も多すぎて胸が痛い。日本は豊かになったが、外国では難民の方々がかつての自分のように、物不足で困っている。できることをしたい。」という、震災とあわせて戦争に関するお話を伺うこともできた。津波や戦争のこと、難民のこと、いずれも普通の生徒の生活とは隔たりのあるものである。プロジェクトを通してこうした生の声に触れ、生徒は当初自分たちが想像していた以上に、この活動が意義深いものであることの気づきを得ることができた。取り組みの成果として、生徒のSDGsへの関心が非常に高まったことが挙げられる。

本校で実施している弁論大会・論作文コンクールの題材や、探究的な学習のテーマとしてSDGsやプロジェクトを意識したものを取り上げる生徒が多く見られた。また、活動を通して、これまで関わりのなかった地域の方との結びつきがいくつも生まれた。その中には、さらに学校の授業でも講演をいただくなど、また別の活動へつながったものもある。服のチカラが新たな縁をつないでくれたものと考えている。

【優秀賞】 岐阜聖徳学園高等学校（岐阜県）

Think about the entire～地球の裏側にも思いをはせて～

生徒による発表（高校1年生）

私たちはこの活動を通して地域や日本だけでなく、世界に視野を広げ、自分たちを客観的にみることを学んだ。「地球の裏側にも思いをはせて」と考えるようになった経緯を発表したい。

昨年2月ロシアによるウクライナ侵攻が始まった。ニュースで連日取り上げられていたが、次第に報道が減り、世間の関心も薄れている。しかし、現在も罪のない人々が苦しんでいる。この現状と世間の意識の差に違和感を感じていたとき、このプロジェクトに出会い、微力ながら私たちの行動で困っている人の役に立てると思い、参加することにした。難民の中には、同世代の子どもたちが多くいることを知ってもらいたいと、3校の小中学校へ訪問し、協力を依頼した。

破れた服や着られない服が集まるのはなぜ？

約4000着の服が集まった一方で、問題もあった。

服の一部が破れていたり、大きなシミがついていたりしたのだ。これは、届け先の方が嬉しいと思わない。私たちは、表面的な活動ではなく、届ける先にはどんな人がいて、何のために行い、誰が笑顔になり、誰が困るのか。届け先へ思いをはせることが大切だと考えた。

逆に批判的なポスターを制作

寄付によって生じる問題を指摘し、読み手が関心を寄せ、一緒になって考えてくれるよう工夫した。

具体的には、環境問題や現地産業への影響を記載し、地域の商業施設に設置した。

海外に目をむけて行動

自国の価値観だけにとらわれず、客観的に世界の問題を検討しなければならないと思い、フィリピンの生徒達と英語で交流を行った。フィリピンの生徒に難民について知っているか尋ねたところ、「単語は知っているが、よく知らない」と回答があり、「服のチカラのプロジェクトのような活動はあるか」という質問には「たぶん無い」と回答があった。国によって知っていることや知識の差があることを学ぶと同時に、日本はとても恵まれていると感じた。

自分たちが良ければ良い、ではない

小中学校・地域・世界への発信を通して、地球の裏側にも思いをはせながら働きかけることが大切だと考えるようになった。今後は難民を多く受け入れているドイツの高校と意見交換を行う予定である。もっと多くのチカラと感心が必要だと感じている。

～以下、英語で発表～

人々の意識を変えることは簡単ではない。しかし諦めてはいけぬ。マイケルジャクソンが作った「Heal the world」という曲の中で「存在するだけでなく生きることを始める」と言っている。人のため、人類のためできることを始めることが「生きる」ことの意味だと思う。これがこの世界を変える鍵だと思うし、このプロジェクトを通して多くのことを学んだ。「自分は役立たずだ」なんて思わないでほしい。なぜなら、私たちは世界を変えることができる能力があるから。家族・友人・地域の方のおかげでこれらの活動を達成することができた。私ができること、あなたができたこと、それは私たちができたということだ。



表面的な活動ではなく

どんな人がいて 何のために行うか
誰が笑顔になり 誰が困るのか

届け先へ思いをはせることが大切

生徒感想文

このプロジェクトを成し遂げることができ、嬉しく思います。これまで自ら他校や企業、海外に働きかける機会がなかったため、自分から関わる大切さを学びました。運搬と仕分け作業はやはり大変でした。大量の服が入ったダンボールをもって、1階から3階まで何回も往復しました。何千枚もの服を仕分けるのも大変でしたが、友人と楽しみながらできました。

活動を通して私たちは本当に恵まれていると感じました。私たちは服が身近に溢れ、どれを買うか悩むのに対し、場所が違えば服がなくて必要としている人もいます。私たちは苦しんでいる人がいることなど、考えなくても生きていけるほど恵まれています。しかし見方を変えれば、関心がなく行動も起こさず、自分事に捉えられない人が増えれば、今後の社会をよりよくしていくことはできないと思います。(省略)今まで身近に起こることにしか目を向けられなかったのが、国際的な問題に視野を広げ、行動を起こしています。この活動は、私たちを変えてくれ、未来をつくるチカラとなりました。

【優秀賞】 岐阜聖徳学園高等学校（岐阜県）

活動詳細

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

岐阜聖徳学園高等学校、岐阜市立柳津小学校、岐阜市立鶉小学校、岐阜市立境川中学校、UNHCR事務局、ユニクロ カラフルタウン岐阜店、ユニクロ 岐阜茜部店スタッフ

【活動内容】

①活動動機・目的

ロシアとウクライナの戦争が始まった時は衝撃的なことであったが、時間が経つにつれニュースで取り上げられる時間は少なくなり、世間も徐々に関心が薄れてきたように感じる。

しかし、現地では未だ戦争が続いており、そこには戦争に関わらなくてもよかった人が巻き込まれ、不自由な生活を強いられている。ウクライナ支援について学ぶ中で、衣食住が以前ほど満たされず、私たちと同じ世代の子が苦しんでいることを知った。そこで、服のチカラプロジェクトを通じて、私たちは勿論、小学生や中学生の子たちにも、自分たちと同じ世代の子が服を必要としていることを知り、理解するだけでなく、関心をもって共に行動を起こしてほしいと思い、このプロジェクトに参加した。

②地元の学校と連携

はじめは本校だけで活動を行う予定だったが、生徒自ら岐阜市内の3校の小学校と中学校の校長先生に電話をし、協力を依頼した。そして、快く承諾していただいた。

「何か遠い世界の話で実感がわかない」という小学生や中学生も多いと考えたため、直接学校へ伺い活動の概要を校内放送や動画を作って説明した。

その際、小学生や中学生が興味を持てるようなポスターや回収BOXを作り、各学校に設置した。成果として大型段ボール15箱を超える、約4,000着の子ども服を回収した。これだけの量を回収できたのは、各学校の先生と私たち、子どもや保護者が同じ方向を向いていたからである。

③課題の再設定

回収した服全てが、満足して着られる服ではなかった。選別をしている際、服の一部が破れていたり穴が空いていたり、大きなシミがついていたりなど、難民の方が嬉しいと感じ得ない服が多々あった。寄贈していただけるのは大変嬉しいが、明らかに着られない服を寄贈するのは、優しさではなく、寧ろ「ゴミを処分する」とこと同義であると感じた。そこで、どのようにすれば「いらぬ服を『服のチカラプロジェクト』と称してゴミとして出す」という人が少なくなるか考えた。これは、「服のチカラプロジェクト」に限らず、ボランティアや善意で行う活動の背景を考えることの大切さと、他者へ想いはせる大切さを訴えるためである。



6年生のクラスに説明しているときの写真。大人でなくても世界に目を向け考える重要性の話をした。

学年：高校1～2年主に4名

活動の枠組み：教科（総合的な探究の時間）

【活動内容】

④地域へ「地球の裏側にも想いをはせて」を訴える

③の課題を受け、私たちは小学生や中学生だけでなく、その服を買っているお父さんやお母さん等、大人に向けてメッセージを発信することが重要であると考えた。子どもの意識を変えることは未来をつくるが、大人の意識を変えることは「今」を変え未来への橋渡しになると考えたためである。「今」の大人の言葉と行動が子どもを変えるチカラになっていくと考えた。そこで私たちは、地域の方が集まるショッピング施設に連絡し、「地球の裏側に想いをはせて～世界に関心を持ち、できることを考えることを諦めない～」をテーマに、A1サイズのポスターを2枚つくって設置した。現在も設置しているが、そこでは何気なく買い物をしている人が足を止め、多くの方が私たちのつくったポスターに関心をもってくださった。中には、親子連れでお母さんが子どもに説明している姿も見られた。そのポスターには、安易に「服を集めることは難民を救う」と書くのではなく、服を集めることの課題点や問題点も指摘し、その上で私たちが世界に目を向けて考えることを諦めない重要性を書いた。



ポスターに書かれている問題点は、文献をたくさん調べ、それらを要約して、誰でも簡単にわかるよう作成した。

⑤活動 世界へ「地球の裏側にも想いをはせて」を訴える

地域に働きかけるだけでなく、海外と繋がり、私たちの活動や考えが「自分たちだけの価値観」になっていないかを客観的に捉える必要性を感じた。自分や自国の価値観だけでなく、国際社会も視野にいれ、服を回収することで誰かを犠牲にしていないか、自分たちの行っていることは正しいことなのか、新たな問題を生み出していないかを客観的に検討する必要性を感じた。文献調査する中で、届け先の国で服が最終的に燃やされたり埋め立てられたりすることで、化学繊維でできた服からは塩素やNOx、SOx、不完全燃焼によって有害ガスを出したり、埋められれば土中にほぼ永遠にプラスチックとして残り続け、生態系に影響を及ぼす可能性があることを学んだ。また、安価で良質な衣類が手に入ることは、現地産業を衰退させる可能性もあることを学んだ。これらのことを、フィリピンの高校生と繋がり、オールイングリッシュで学んだことを伝え、「地球の裏側にも想いをはせる」大切さについて議論した。そして、この言葉が活動の本質をとらえるものとなった。また、議論の中で、問題となり得そうな点を見いだすことができたが、これは今後調査したい。

⑥今後の展望

届けることで引き起こす可能性のある問題については、フィリピンやドイツの高校生と交流を重ねて慎重に検討していく。最終的には、学びをもう一度整理し、改めてポスターを作って発信していく。

【UNHCR特別賞】 横浜市立嶮山小学校（神奈川県）

世界にとどけ「4・5組SDGsプロジェクト」

～英語を使って世界20億の人々にSDGsを知ってもらおう～

生徒による発表（小学3年生、4年生）

私たち4・5組は16名のクラスで、1年生から6年生と一緒に過ごしている。新しいことにチャレンジするのが大好きで、とても仲のよいクラスで毎日楽しく勉強している。3年前よりSDGsの活動をしていて、今日はその様子をまとめたビデオを作ってきた。

～以下ビデオ映像より～

3年前は、コロナのために色々な活動ができなかった。動画や国連の本を使って、世界で何が起きているのかを知った。ご飯が食べれなかったり、学校へ行けなかったりする子がたくさんいることを知り、とても悲しい気持ちになった。そして、自分たちに何ができるのか考えた。2年前になって、ようやく校外や地域で活動ができるようになった。海の中にたくさんのプラスチックごみがあることを知った時、とても驚いた。自分たちのすぐそばから、川を下って海へ行くこと知り、近所のゴミ拾い活動を行った。

ユニクロの活動では、出張授業を聞いたあと、校内で服の回収を呼び掛けた。思っていた以上にたくさんの方が服を持ってきてくれて、とても嬉しかった。さらに、私たちはSDGsの活動を英語で伝えた。

これからやりたいことを一人ずつ英語で発表

平和の大切さをみんなに伝えたい

自然を守りたい

女の子のための学校を作りたい

綺麗な海にしたい

どうすれば難民を救えるか考えたい

環境の研究者になりたい

世界中に木を植えに行きたい

SDGsの絵本をかきたい

難民に食料を届けたい

薬剤師になって苦しんでいる人を助けたい

海のゴミを拾いたい

国連で働いて食糧問題を解決する

海の生き物にゴミを食べさせたくない

難民に服を届けるボランティアをしたい

ぼくたちは、今日ここに来ることができてとても嬉しい。なぜなら、自分たちの取組をたくさんの人に知ってもらえたからだ。そして、未来の地球のために、たくさんの努力をしてくれている国連やユニクロの方は本当にすごいと思う。

“Never give up, great things take time”

ぼくはこの言葉が好きだ。くじけそうになった時に思い出す。皆さんにもこの言葉を贈りたい。

ぼくたちはこの言葉を胸に、これからも頑張っていく。



生徒感想文

自分で発信したことがちゃんと形になったことで、自信につながった。洋服を捨てないようになった。ぼくたちの活動が難民の人たちのためになることがすごくうれしい。自分たちは社会の役に立っているんだと実感している。ぼくたちは、これからの社会がすべての人にとって住みやすい社会になるよう、活動を続けていく。

【UNHCR特別賞】 横浜市立嶮山小学校（神奈川県）

活動詳細

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

嶮山小学校PTA

【活動内容】

嶮山小学校個別支援学級では、3年前よりSDGsの学習を行っている。今までに動画や本などを使って世界の飢餓・貧困・教育・海や山の環境問題・ゴミ問題などについて学習を進めてきた。校内では、技術員や給食調理員などに協力してもらい、学校で出るごみの総量や残飯の量、リサイクルの方法などをまとめて校内に掲示をした。ただ、昨年まではコロナ禍ということもあり、学校外で調査を行ったり、外部からの講師を招いたりなどのアクティブな活動はなかなかできなかった。もっと活動の場を広げたい子どもたちは、「実際に世界のためになる活動をしたい」「どうしたらもっとたくさんの人に世界の現状やSDGsの活動を知ってもらえるんだろう」と自問自答する時期が続いた。今年に入り、やっと様々な活動を行える状況になったため、以前から希望していた「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」に参加することになった。

待ちに待った「世界のためになる活動」ということで、はりきってどのように進めていけばよいかを考えた。ユニクロとの活動に向けて、まずはたくさんの人にSDGsについて知ってもらうことが先決と考え、その方法について話し合った。話し合いの結果、「SDGsは日本だけでなく、世界の問題であること」「できれば、たくさんの人に向けて今世界で起こっている多くの問題について知らせたい」ということだった。どうしたら世界に伝わるのかと考えた時、「日本語で伝えると1億2千万人だけど、英語で伝えたら20億の人に伝わるのではないか」ということを思いついた。

特性がある彼らが英語でSDGsの内容を伝えるとなると、かなりハードルが高くなるだろうという心配もあったが、「やってみたい。世界の皆に伝えたい」という彼らの気持ちを大切にしたいという思いが勝った。そこで、まずは子どもたちに伝えたい内容を書いてもらい、それを教師が英語に翻訳した。さらに、せっかく英語で伝えるのなら、伝わる英語で話したいという希望があったため、外国人講師のネイティブの英語を動画に撮り、その動画を見ながら練習することにした。毎日、学校と家庭で練習を重ね、動画を撮る段階になったら全員が英語を暗記して、台本を見ることなく堂々と話すことができた。その動画を全校児童に見てもらい、その上でユニクロの活動について協力を求めた。1年生から6年生まで、まずは「4・5組さんが英語を上手に話している」ことに驚き、さらには内容ももっと知りたいと何度も動画を見直してくれ、動画を見た翌日からすぐに「着なくなった服」を持ってきてくれた児童もいた。最終的には1580枚の服を集めることができたのも、4・5組の児童の「みんなに伝えたい」という真摯な気持ちが伝わったからだと思っている。

学年：個別支援学級1年生～6年生16名
活動の枠組み：教科（具体的に：生活科・総合的な活動の時間）

【その他特記事項】

「英語でみんなに伝えることができた」「ユニクロの“届けよう、服のチカラ”プロジェクトに参加することで、実際に世界の子どもたちの手助けをすることができた」という自信につながった。今回の活動に参加したことで、もっと世界を救いたいという気持ち生まれ、次の活動として「国連WFP」に訪問し、飢餓問題について取り組むことになった。ユニクロの活動に参加することがきっかけとなり、子どもたちが大きく成長したこと、そして彼らを取り巻く大人たちも「リミットを決めてしまわない教育」が必要であることを実感した。

＜英語による動画を撮影している場面＞
「動画が苦手なら音声だけでもいいよ」ということにしたが、すべての子どもたちが「大丈夫、たくさん練習して全部覚えたから、動画にとっていいよ」と言い、本当にになにも見ずに堂々とした姿で撮影を行うことができた。



上の写真は、学校で回収をする際に使ったBOX。そして集まった服の数を発表した時の写真。

下の2枚の写真は、ユニクロの社員の方の出張授業の様子。集まった服を丁寧にたたんで段ボールに詰めている様子。

